

**令和6年度
福島県 集落自主活動に係る伴走支援事業**

小野町谷津作行政区業務実施報告書

獨協大学こまち「大地の泉」つながるプロジェクト

[目次]	ページ
1. はじめに.....	1
2. 小野町谷津作行政区の概要.....	1
2.1. 小野町・谷津作行政区の位置と概観	
2.2. 小野町の人口動態	
2.3. 小野町の気候	
3. 今年度の活動実績と評価	6
3.1. ミーティングの開催	
3.2. 現地活動	
3.2.1. 町内の視察	
3.2.2. 東方文化堂への訪問と源泉活用案の実施	
3.2.3. 現地の方との懇談会	
3.2.4. 八雲神社例大祭(子ども神輿)への参加	
3.2.5. 現地視察の評価と今後の展望	
3.3. 「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告会	
4. 活動を通して見えてきた課題	13
5. 次年度の活動計画～サポート事業への協力に向けて～	14
5.1. 源泉を活用した温泉神社のお祭りの復活	
5.2. 福島県復興支援物産展の復活開催	
5.3. 温泉マルシェの開催	
6. おわりに	15

1. はじめに

2019年度福島県「大学生の力を活用した集落復興支援事業」に、はじめて応募した獨協大学地域活性化プロジェクト米山チーム Part 2 は、1年目に担当となった小野谷津作行政区の現地調査を実施し、対象地域の実態把握と課題の抽出を行った。しかし2020年度は新型コロナウイルスの影響で活動が滞りその間にメンバーも大幅に入れ替わったため、2021年度は学び直しの期間と捉え、オンラインを中心に活動を行った。2022年度は新型コロナウイルス感染症の規制緩和に伴い、現チーム初の現地での活動を行った。実際に現地を訪れ、現地の実態調査と課題を確認した。2023年度は、「集落自主活動にかかる伴走支援事業」に申請するにあたり、チーム名を「米山チーム Part 2」から「獨協大学こまち『大地の泉』つながるプロジェクト」に変更をし、活動を展開してきた。現地の実態調査やオンラインでの活動から得た情報や課題により、昨年度初頭に今後、源泉を活用して温泉神社のお祭りを復活させるという方針を設定した。そこで、今年度は決定した今後の方針に沿う形で、これからの活動に向けて活動してきた。

「獨協大学こまち『大地の泉』つながるプロジェクト」は、船上有希(代表：フランス語学科3年)、梅橋萌(副代表：同3年)、坂口諒(国際環境経済学科4年)、鈴木翔大(ドイツ語学科4年)、水野雄清(英語学科4年)、高橋那奈(フランス語学科3年)、平野雅己(法律学科3年)、高野祥(同1年)の5学科8名からなるチームである。

「獨協大学こまち『大地の泉』つながるプロジェクト」は今年度2度の現地活動を行った。1回目の現地活動は2024年8月31日・9月1日に行った。視察には小野町観光協会会長の二瓶晃一氏、谷津作行政区住民の斎藤直美氏、小野町地域おこし協力隊の阿井由加子氏に同行していただいた。2日間を通して、あぶくまキャンブランドをはじめとする観光資源、源泉(大地の泉)や東堂山の視察を行った。その後、八雲神社の総代の方や谷津作行政区の住民の八雲神社例大祭関係者との懇談会を開催し、翌月に控える八雲神社例大祭についての話し合いを行った。また、2024年10月12日・13日には2回目の現地活動を行い、八雲神社の例大祭(子ども神輿)に参加した。八雲神社例大祭では、神輿の装飾、祭礼の参加、神輿の補助、神輿の片付けを行った。昨年に続いての例大祭開催であったため、地元住民からの関心も高く、学生メンバーもより多くの地元住民と継続的に交流を図ることができた。また、昨年度とは異なり、子ども神輿後にビンゴ大会を開催した。

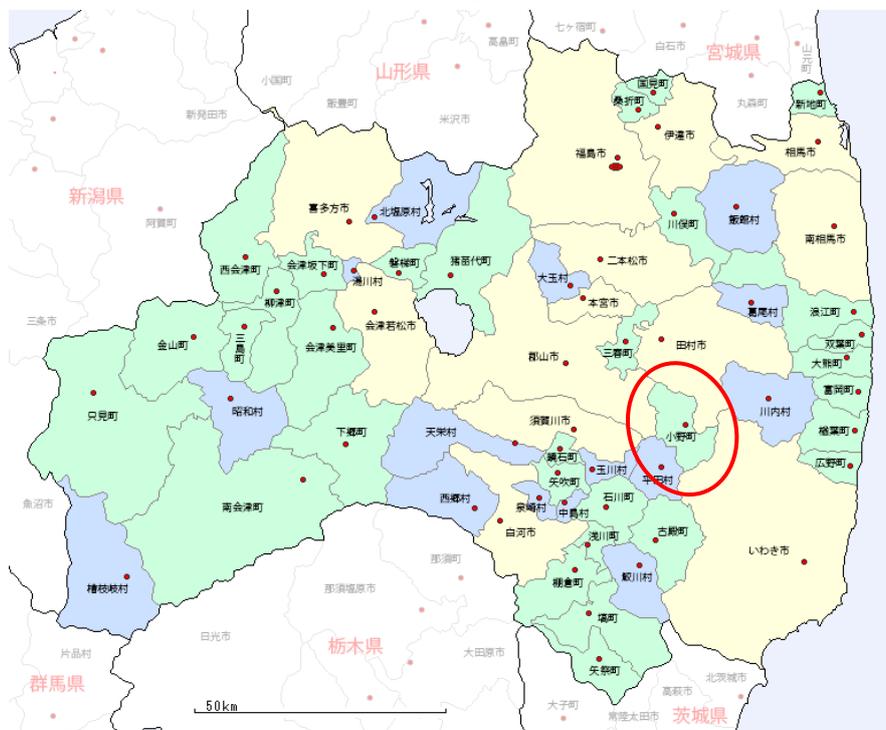
本報告書では、「獨協大学こまち『大地の泉』つながるプロジェクト」の小野町谷津作行政区の概要と課題設定について報告する。第2節では小野町谷津作行政区における概要と課題設定を述べる。第3節で今年度の活動実績を報告するとともに評価を行う。そして、第4節では活動を通して見えてきた課題を述べて、第5節で次年度の活動計画について述べる。

2. 小野町谷津作行政区の概要

小野町は福島県中通りの東部に位置し、阿武隈山系の中心地に属し、田村郡の南部に位

置している。北に田村市、南にいわき市、西に郡山市・平田村と隣接する(図表1参照)。小野町には27の行政区があり、谷津作行政区は旧小野新町に位置している(図表2参照)。

図表 1. 福島県小野町の位置



[出典] 福島県の地図(市町村区分図) (<https://uub.jp/map/fukushima/>)

図表 2. 小野町の行政区分と谷津作行政区の位置



[出典] 「都市と田園環境の共生等のあり方について」(事例発表)(小野町地域整備課)(以下の URL)を参照。(<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/29929.pdf>)

2.1. 小野町・谷津作行政区の位置と概観

小野町の沿革は、1889(明治 22)年に、飯豊村、小野新町村、夏井村が誕生し、1896(明治

29)年には小野新町村が小野新町になり、1955(昭和 30)年には、小野新町・飯豊町・夏井村が合併して、小野町が誕生した。図表 2 をみると、谷津作行政区は旧小野新町に位置している。

2025(令和 7年)1月1日時点で、小野町の人口は 8,514 人(男性 4,260 人、女性 4,254 人)、世帯数は 3,375 世帯である¹。学校生徒数は 2023(令和 5)年時点で幼保連携型認定こども園の入園者数が 151 人、小学校生徒数が 389 人、中学校生徒数が 281 人となっている²。

小野町は郡山市といわき市のちょうど中間に位置しており、車でのアクセスは磐越自動車道で郡山 JCT から 39km(約 30 分)、いわき JCT から 37km(約 25 分)、電車のアクセスは JR 磐越東線で郡山駅から 50 分余り、いわき駅から 45 分弱の距離にある。このことから住民の生活圏も両方に掛かっている。

2.2. 小野町の人口動態

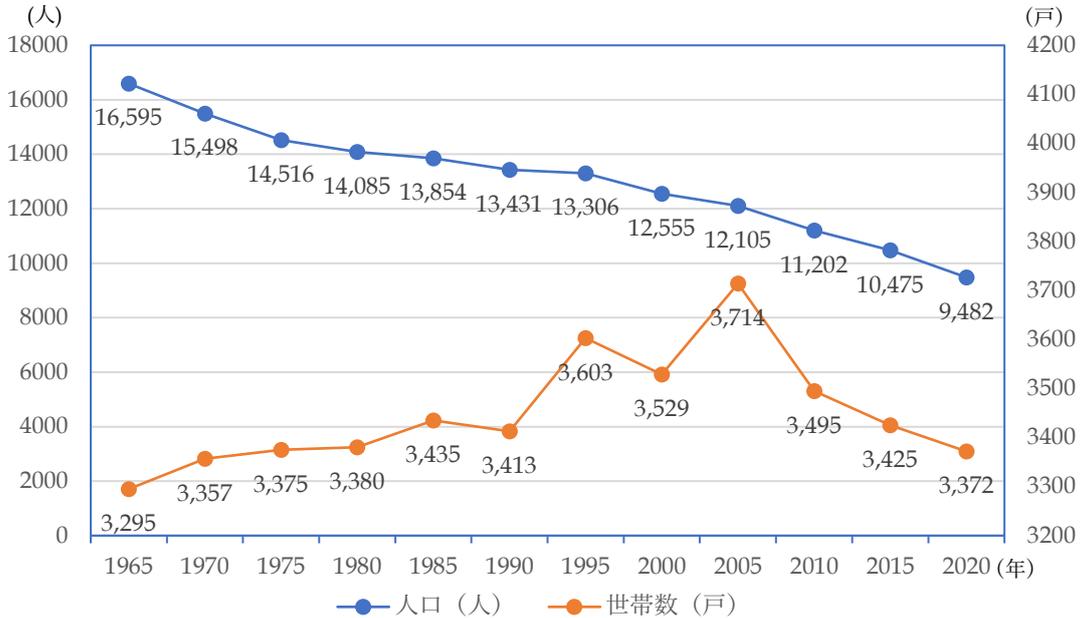
図表 3 は、1965(昭和 40)年以降 2015(平成 27)年までの小野町の人口と世帯数の推移を示したものである。1965 年には小野町の人口は 16,595 人であったが、1980(昭和 55)年頃までは急速に減少して、その後 1995(平成 7)年頃までは緩やかに低下して 1995 年には 13,306 人となり、その後再び減少を加速させて 2015 年には 10,475 人となっている。その後、2020(令和 2)年には 9,482 人と 1 万人を切っている。小野町における世帯数は、1965(昭和 40)年から 1990(平成 2)年までなだらかな増加傾向にあったが、1990(平成 2)年以降は 2005(平成 17)年まで増減を繰り返し、2005(平成 17)年以降は 2020(令和 2)年に至るまで世帯数の減少が続き、2020(令和 2)年には 3,372 世帯にまで減少している。

図表 4 は、1980 年から 2020 年までの小野町の年齢 3 区分別の人口の推移を表したものである。1980 年に比べて 2020 年には年少人口(0~14 歳)は約 7 割減少しているのに対し、老年人口(65 歳~)は 2 倍以上に増加しており、生産年齢人口(15~64 歳)は 2 分の 1 強まで減少している。特に、小野町の高齢化率に着目すると、1980 年の 10.8%から 2020 年には、35.9%に上昇しており、高齢化の傾向が顕著であることが分かる。

¹ 小野町ホームページ(<https://www.town.ono.fukushima.jp/home.html>)を参照。

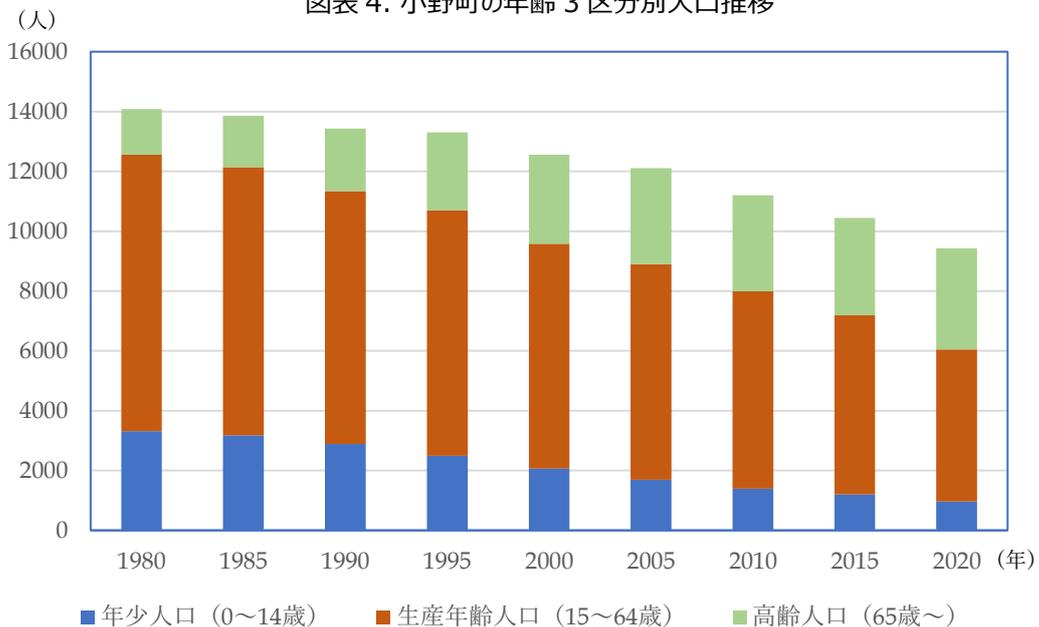
² 「政府統計の総合窓口(e-stat)」、調査項目を調べる—学校基本調査(文部科学省)「学校調査表(幼保連携型認定子ども園)」、「学校調査表(小学校)」、「学校調査表(中学校)」(以下の URL)を参照。<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400001&tstat=000001011528>

図表 3. 小野町の人口と世帯数の推移



[出典]小野町ホームページ 統計情報(以下の URL を参照)を基に作成。[原資料]国勢調査による。
(<https://www.town.ono.fukushima.jp/soshiki/3/toukei.html>)

図表 4. 小野町の年齢 3 区分別人口推移



[出典]「政府統計の総合窓口(e-stat)」、調査項目を調べる—都道府県・市区町村のすがた(社会・人口統計体系)、市区町村データを基に作成。
(<https://www.e-stat.go.jp/regional-statistics/ssdsvie/municipality>)

2.3. 小野町の気候

小野町は内陸性の気候で、山々に囲まれていることから山岳気候を呈する準高冷地であ

る³。この冷涼な気候や昼夜の温度差といった特性を活かして、水稻を主として、野菜、畜産、きのこ、葉タバコ等の農作物を生産している。気温が低く昼間と朝夕の寒暖差が大きいため、野菜がおいしく育つと言われている。図表 5 を見ると、降水量は 1,000～1,500mm 程度で、日本全体の平均との大きな乖離は見られないが、日平均気温は 10℃前後と比較的寒冷である。また、図表 6 を見ると、冬の日最低気温は 0℃を下回る一方、夏は日最高気温が 30℃を超えるなど、1 年を通して気温の差が大きい。

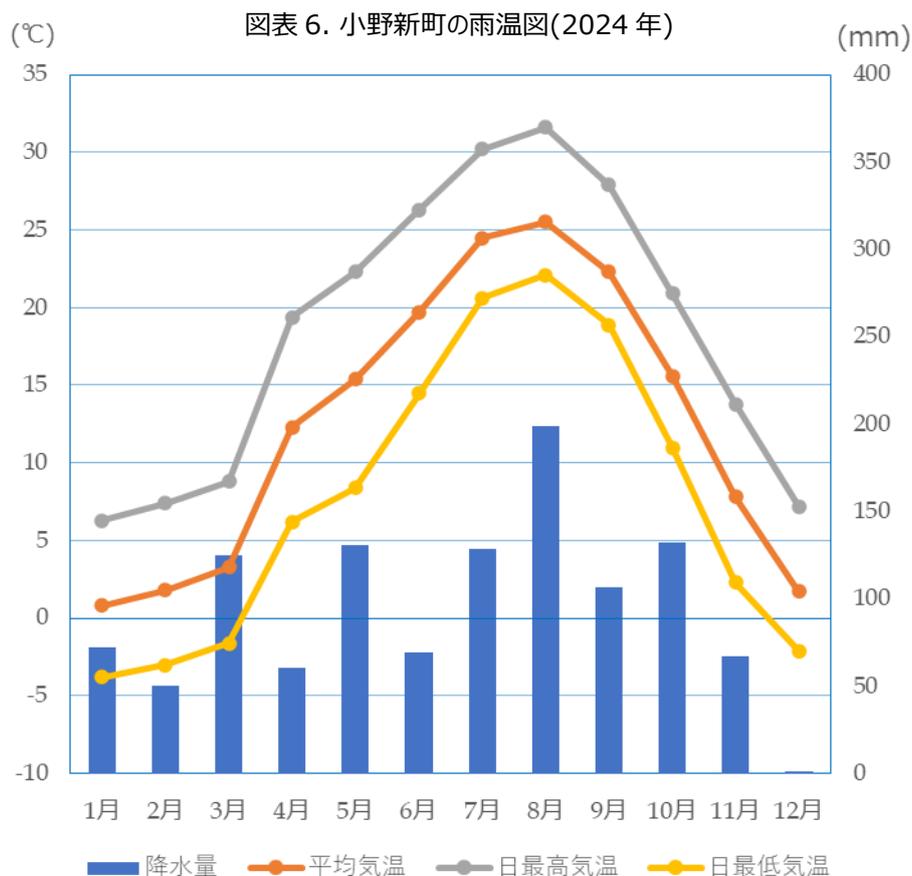
図表 5. 小野町の気候

年	降水量 合計 (mm)	気温			風向 平均風速 (m/s)	日照時間 (h)
		平均				
		日平均 (℃)	日最高 (℃)	日最低 (℃)		
1980	1132.0	9.5	14.2	4.9	1.2	2024.2
1985	1152.0	10.3	15.2	5.7	1.2	2099.8
1990	1508.0	11.3	16.3	6.7	1.3	1501.1
1995	1302.0	10.2	15.0	5.9	1.3	1483.1
2000	1321.0	11.0	15.9	6.6	1.1	1498.4
2005	1025.0	10.4	15.6	5.8	1.1	1554.2
2010	1492.5	11.2	16.8	6.5	1.1	1589
2015	1093.0	11.4	16.9	6.6	1.2	1719.9
2020	1091.5	11.7	17.0	7.2	1.2	1542.4
2024	1142.5	12.6	18.5	7.8	1.4	1954.8

[出典]気象庁 過去の気象データ検索 年ごとの値 (以下の URL) を基に作成。

(https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/view/annually_a.php?prec_no=36&block_no=0304&year=2024&month=&day=&view=)

³ 小野町公式ウェブサイト「町の概要」「気候」(以下の URL)を参照。
(<http://www.town.ono.fukushima.jp/soshiki/2/gaiyou.html>)



[出典]気象庁ホームページ「小野新町(福島県)2024年(月ごとの値)主な要素」(以下の URL)を参照して作成。
https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/view/monthly_a1.php?prec_no=36&block_no=0304&year=2024&month=3&day=&view=p1

3. 今年度の活動実績と評価

今年度の「獨協大学こまち『大地の泉』つながるプロジェクト」はさまざまな活動を行い、住民との交流を行ったほか、現地において事業への認知の向上を図った。以下でそれぞれの活動について紹介する。

3.1. ミーティングの開催

今年度は昨年に引き続き、現地の方々を交えて Zoom を通したオンラインでのミーティングを実施した。コロナ禍が明けたことを受け、対面でのミーティングも行い、現地視察の準備や物産展の打ち合わせなども行った。以下で今年度行ってきたそれぞれのミーティング内容について紹介していく。

図表 7. 2024 年度活動報告：ミーティング記録

日付	場所	内容	参加者
2024年 5月15日	学内	・新メンバー顔合わせ	学生：4名
2024年	Zoom	・今年度以降の活動についての話し合い	現地の方：3名

6月18日		→源泉活用と八雲神社例大祭への参加決定	学生：4名
2024年 7月3日	学内	・8/31、9/1の現地調査の出欠確認 ・現地調査に係る必要書類の記入	学生：6名
2024年 8月19日	Zoom	・源泉活用案の再考	学生：3名
2024年 8月26日	Zoom	・8/31、9/1の現地調査のスケジュール確認 ・10/12、10/13の八雲神社例大祭の内容確認	現地の方：3名 学生：3名
2024年 12月19日	Zoom	・今年度の現地調査の振り返り ・次年度以降の活動について	現地の方：3名 学生：4名
2025年 2月6日	Zoom	・報告会の日程の確認 ・次年度以降の活動について	現地の方：3名 学生：4名

9月の現地視察を受け、10月は八雲神社例大祭にスムーズに参加することができた。今年度のミーティングを振り返ると、6月のミーティングで定まった今後の方針をもとに、予定通り進めることができたことについては評価できる一方、ミーティングの参加者のばらつきや連絡不足、スムーズなミーティングができていなかったことが課題として挙げられる。これらのことから、ミーティングの日程を不定期ではなく、年初にミーティングの日程をあらかじめ設定しておく必要があると考える。あらかじめ日程を設定しておくことで、参加者が増加し、メンバー間のコミュニケーション不足を解消することが期待される。

3.2. 現地活動

今年度は8月31日(土)、9月1日(日)と10月12日(土)、13日(日)のそれぞれ1泊2日で現地入りし、現地の観光資源や源泉等の視察を通して小野町について学ぶとともに、行政区のお祭りに参加することで、より一層地域に対する理解を深めることができた。実際に訪れた場所の概要や感じたことをいくつかの項目に分けて、活動の様子とともに紹介する。

図表 8. 行程表

時程	行程
8月31日(土) 09:48～11:04	東北新幹線 やまびこ 177号(仙台行) 東京駅／大宮駅／宇都宮駅発～郡山駅着 東京駅・大宮駅・宇都宮駅から各自乗車、新幹線内にて合流
11:17～12:09	JR 磐越東線(小野新町行) 郡山駅発～小野新町駅着
12:10頃	小野新町駅にて現地スタッフと合流
12:30～13:30	「KITCHEN フライパン」にて昼食
13:40～17:00	源泉、八雲神社、東堂山、あぶくまキャンプランドなどの視察 現地の方の車にて宿泊先へ移動
17:10～18:30	「レストラン志木」にて夕食
19:00～21:00	「レストラン志木」にて地元の方との懇談会 ※八雲神社中心のお祭りのアイディアについて共有し、住民の意見を聞く。

9月1日(日)	
7:30～8:30	宿泊先にて朝食
9:30～14:00	宿泊先から移動した後、小野町内の観光資源の視察 現地にて昼食した後、町内の視察
14:36～15:37	JR 磐越東線(郡山行)(54分) 小野新町駅発～郡山駅着
16:06～17:24	東北新幹線 やまびこ 60号(東京行) 郡山駅発～大宮駅/東京駅着 新幹線にて移動後、大宮駅・東京駅にて各自解散・帰宅

3.2.1. 町内の視察

到着後、町の大通り沿いにある KITCHEN フライパンにて昼食を摂った。広々とした清潔感のある店内でランチセットを頂いた。住人の方が集まって和気あいあいとランチを楽しんでいて、町の憩いの場であると感じた。

町内の観光地である東堂山やあぶくまキャンプランドを視察した。実際に足を運び、散策することで町内の文化的な側面について理解することができた。昨年に引き続き訪れた東堂山は、昨年と比較すると雑草が生い茂り、整備が行き届いていない印象があった。二瓶晃一氏に理由を伺うと、自治体としての整備費用や人員が不足しているとのことであった。しかし、我々以外にも訪問者がいて観光地としての魅力は十分にあるように感じた。

写真 1. KITCHEN フライパン



写真 2. 東堂山



(注)メンバーが撮影(以下、とくに記載にないものはメンバーが撮影したもの)。

八雲神社は 10 月に行われる子ども神輿の開催場所である。視察により会場がどのような場所なのかについて確認し、開催へのイメージを膨らませることができた。

3.2.2. 東方文化堂への訪問と源泉活用案の実施

今回は源泉を採取し、源泉の活用に取り組んだ。プラスチックケースに源泉を集め、台車に乗せて地区にある東方文化堂に運び、足湯と温泉卵の製作に取り組んだ。源泉の温度

は低く、触ると冷たい印象を受けた。採取するためにはぬかるんだ地面を進み、足場の悪い中、腕を伸ばして採取する必要があるため、難易度が高く感じた。そのため、実際に活用を継続していくためには、源泉周辺の環境整備を行う必要があると考える。

採取した源泉の中に、小野町産の卵をいれ、温泉卵調理器具を設置して温泉卵を製作した。源泉ならではのほのかな硫黄の香りが漂う濃厚な黄身の質の良い温泉卵が出来上がり、学生メンバーと地区の方々両方から高評価を得た。

また、さらに温泉卵の製作過程で生まれた温水を足湯として体験した。足湯でリフレッシュ効果を感じられると共に、今回の方法であれば手軽に足湯体験をできるため、地区のイベントなどでの実施も可能であると考えます。

写真 3. 源泉採取の様子



写真 4. 製作した温泉卵



写真 5. 東方文化堂と運搬の様子



3.2.3. 現地の方との懇談会

8月31日(土)の夜に谷津作行政地区内のレストラン志木にて、八雲神社の総代の方や谷津作行政区の住民の八雲神社例大祭関係者との夕食を兼ねた懇談会を開催した。今回の懇談会では、行政区の方々にこれまでの活動概要を説明するとともに、10月13日(土)・14日(日)の八雲神社例大祭に向けた話し合いに参加させていただいた。普段のオンライン・ミーティングなどでは関わることのない行政区の方々と交流する重要な機会であったため、今年度のメンバーの自己紹介から行き、事業についての説明や例大祭に向けた話し合いを進めた。時間の限られた中での話し合いであったが、地域住民が実際に挙げる課題やそれに向けた解決策の提案など、より具体的なお話をさせていただくことができた。今年度は八雲神社例大祭の日程と地域の小学校の運動会が重なってしまったため、子ども神輿の中心となる子どもたちや準備を行う大人の負担を考え、祭事を10月12日(土)、子ども神輿を10月13日(日)に分散して開催するという新たな試みを行うことを決定した。

写真 6. レストラン志木



写真 7. 名物のハンバーグ定食



3.2.4. 八雲神社例大祭(子ども神輿)への参加

10月12日(土)、13日(日)の現地活動では、八雲神社の例大祭(子ども神輿)に参加した。前日11日(金)の夜に学生1名が現地入りし、翌12日(土)の八雲神社例大祭の祭事の参加と神輿の整備の活動を行った。

図表 9. 行程表

時程	行程
10月12日(土)	

10:00～	八雲神社の祭典に参加
09:48～11:04	※前日の10月11日(金)に田村市の事業に参加するメンバーのみ 東北新幹線 やまびこ 177号(仙台行) 東京駅/大宮駅発～郡山駅着 東京駅・大宮駅から各自乗車、新幹線内にて合流
11:17～12:09	JR 磐越東線(小野新町行) 郡山駅発～小野新町駅着
12:10	小野新町駅にて現地の方と合流
12:30～13:30	現地のレストランにて昼食
13:30～17:00	現地の視察
18:00～21:00	現地の方の車で宿泊先に移動 「レストラン志木」にて夕食、祭事直会
10月13日(日)	
7:30～8:00	宿泊先にて朝食
9:00～12:30	宿泊先から移動した後、子ども神輿、ビンゴ大会の準備・手伝いを行う
12:30～14:30	
14:36～15:37	「レストラン志木」にて昼食
16:06～17:24	JR 磐越東線(郡山行)(54分) 小野新町駅発～郡山駅着 東北新幹線 やまびこ 60号(東京行) 郡山駅発～大宮駅/東京駅着 新幹線にて移動後、大宮駅・東京駅にて各自解散・帰宅

コロナ禍明けを受けて再開された八雲神社例大祭(子ども神輿)に、昨年に引き続き参加した。今年は八雲神社例大祭当日と地区の小学校の運動会の開催が重なってしまったため、祭事と子ども神輿を2日間に分けるという新たな試みを行った。

写真 8. 装飾後の神輿



写真 9. 神輿祭りの様子



また、子ども神輿のほかに、谷津作地区研修センターにて子どもから大人までが楽しめるビンゴ大会を開催した。学生メンバーは、行政区の子どもが担ぐ神輿の清掃、装飾を行った後に祭典に参加し、神輿の補助を行った。子ども神輿が終わった後は、ビンゴ大会の司会進行を含む運営補助を行った。昨年に引き続き行政区の行事に参加することができ、達成感を感じるとともに、地元住民の皆様覚えていてもらえたことに嬉しく感じ、地域と学生が一体になっている感覚があった。

写真 10. ビンゴ大会の様子



3.2.5. 現地視察の評価と今後の展望

以上の現地活動を総括して評価し、今後の展望を図表 10 にまとめた。

図表 10. 現地活動の評価と今後の展望

評価	展望
<ul style="list-style-type: none"> ・小野町の雰囲気や魅力を実感することができた。 ・小野町の温かさを感じる事ができた。 ・実際に現地に行って、お祭りを体験することができた。 ・行政区の行事に 2 年連続で参加できたことで地域の皆様とのより濃い関係を構築することが出来た。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学生の力がなくても現地の人の力だけでも祭りを運営できるような新しいアイデアを考えたい。 ・小中学生に運営に参加してもらえような企画を作る。 ・区長や町長、行政機関などと話し合いの場を設けたい。 ・考えたアイデアを来年度以降に実行に移す。

3.3. 「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告会

2月8日(土)に福島県で「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告会が行われ「獨協大学こまち『大地の泉』つながるプロジェクト」は代表の船上とメンバーの坂口、高橋が参加した。多くのチームの活動報告を聞き、次年度以降の参考となることもあった。活動報告会後には交流会も行われ、今後も他チームに負けないうくらい頑張ろうと気持ちを

入れ直すきっかけにもなった。

4. 活動を通して見えてきた課題

(1)住民間での交流・つながりの減少

8月31日(土)夜にレストラン志木で谷津作行政区に住む青年層から高齢層までの住民の方々と懇談会をした際に、住民間につながりが希薄になっていることを伺った。特に、地域の子ども会などに加入している子どもが少なくなっており、地域とのつながりが希薄になっている傾向にあることが感じ取れる。地域内には交流機会やコミュニティスペースといった場所は少なくコロナの影響もあったことで近年ではより深刻な状況となっている。昨年度も同じ課題について確認したが、懇談会を受けてこの課題について再確認する形となった。

(2)大地の泉活用に対するさまざまな障壁

現地住民の方の話を見ると源泉である「大地の泉」を活用するためにはさまざまな障壁があることが理解できた。まず地権の問題である。旅館である小町温泉が建っていた当時はこの土地は共有地とされていたが、現在では土地の所有者が存在しており問題は容易ではない。

さらに土地の性質も問題だと言えよう。この土地は源泉が常に湧き出ている状態であるため土に水分が浸透しぬかるんでいる。かつて旅館が建っていたが現在の制度では建物の建築などは安全上の観点から制限されているようである。写真11の通り、源泉の周りには何もなく畑の中にポツンと存在している。そして湧き出た水分を豊富に含んでいる土地のため常にぬかるんでいる。

写真 11. 源泉周辺の土地



(3)若者の担い手不足

懇談会の中では地域のお祭りや運動会などのイベントを取り仕切る若者の存在がないとの声も上がった。有志の方々に集まる谷津作青年団に参加したがない住民や、そもそも自治会に入らなくても良いと考えている人もいるという。地域に対する価値や地域貢献する意義を見出せないために参加が進まないのも問題点として挙げられるだろう。

5. 次年度の活動計画～サポート事業への協力に向けて～

5.1. 源泉を活用した温泉神社のお祭りの復活

源泉を活用した温泉神社のお祭りの復活については、昨年のミーティングで行うことが定まったものである。谷津作行政区において、10月12日(土)・13日(日)に開催された八雲神社例大祭のようなイベントを開催することによって、源泉(大地の泉)を活用するとともに、谷津作行政区の住民間のつながりを強固にしたいと考えている。現時点では、温泉卵と足湯の活用法は実証済みであり、他にも大地の泉の湯を利用したプールを行うことや流しそうめんを行うなどのアイデアが出されている。しかし、大々的に実際に行うには源泉の衛生面をはじめ、さまざまな障壁が存在する。したがって、具現化に向けて、現地の方との話し合いを重ね、1つひとつ障壁を解消していく必要があると考えられる。

図表 11. 温泉神社の祭りの概要と期待される効果

企画の概要	<ul style="list-style-type: none">一度幕を閉じた温泉神社のお祭りを学生のアイデアのもと復活させる。神社の祭典と併せて、大地の泉をいずれかの形で利活用したイベントを開催する。
期待される効果	<ul style="list-style-type: none">谷津作行政区の魅力を知ってもらう機会の創出谷津作行政区に住む住民同士のつながりを強化谷津作行政区の「共通の楽しみ」の創出大地の泉の利活用

5.2. 福島県復興支援物産展の開催再開

前年度までは獨協大学の獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo”というイベント期間内の企画として本事業に携わる複数チームで福島県復興支援物産展を合同開催していた。この物産展は小野町の特産品を販売することで、大学生や大学スタッフ、獨協大学の周辺住民に小野町について知ってもらうことを目的としている。今年度は、例年物資の調達を担当して下さっていた小野町地域おこし協力隊の阿井由加子氏の活動任期満了に伴い手配に障壁があったため参加を見送った。次年度以降では、手配方法を確立し、福島県復興支援物産展への参加を再開する。また、広報の方法を改善しながら、より多くの人々に小野町のことを知ってもらうきっかけとなるよう、更に活動を拡大させていきたいと考えてい

る。

5.3. 温泉マルシェの開催

谷津作行政区、そして小野町全体を盛り上げていくためのアプローチ方法としてマルシェを提案したい。ここでは「大地の泉」にちなんで温泉マルシェという形で紹介していく。住民へのヒアリングや意見交換会などから住民の中でも源泉が湧き出ていることを知らない人々が多いようだ。源泉が湧き出ているこの地を知ってもらうことを目的とし全国各地の、温泉にちなんだ商品を販売する。他地域の商品をここで行うことにより少なくとも住民が興味・関心を持ってくれると考えた。隣の田村市瀬川地区で集落復興支援事業を行っているセガワ応援隊は「新そば収穫祭&軽トラマルシェ」を企画し、開催に協力している。このイベントは住民から高い評価を得ており、住民間の交流の拠点となっている。こうした取り組み事例を参考にしながら、まちにあったマルシェの形を模索していきたい(図表12参照)。

図表 12. 温泉マルシェの開催の提案

企画の概要	<ul style="list-style-type: none">・源泉が湧き出ている土地や徒歩圏内にある小野新町駅前のスペースを使い小規模なマルシェを開催する。・地元の特産品、小野高校が商品開発したもの、源泉周辺地域での農産物などと合わせて温泉にちなんだ商品(食品や雑貨)を販売。・大地の泉のPR活動も盛り込む。
期待される効果	<ul style="list-style-type: none">・地域住民、町外の来場者など幅広い人たちの参加が見込める。・地域資源で魅力の1つでもある「大地の泉」について知ってもらうことができ住民全体で源泉を活用した主体的な取り組みへの参加につながる。・私たちのチームのメンバーも地域の人と関わり、そして交流をすることで小野町についてもっと知ることができる。・住民同士がコミュニケーションをとることができる1つの交流拠点としての機能にも期待ができる。・町内外から来場者が集まることで、将来、小町温泉が復活した際に、「行ってみよう」という顧客を増せる。
具体的な企画案	[時期]秋～冬頃 [場所]小野新町駅前スペース [客を呼び込む仕組みづくり]小学生に「マルシェ開催のお知らせ」を家に持ち帰ってもらい、ご家族に広報する。地域の回覧板で広報する。小野町のホームページにアップしてもらう。SNSで発信する。小野新町駅掲示板ならびに郡山駅掲示板での掲示。 [イベント]温泉グルメ試食会の開催など

6. おわりに

今年度は、2度の現地訪問を中心に様々な活動を展開してきた。この1年間の活動を振り返ると、源泉活用の基本方針について決め、活用案の実施を行うことができ、1歩前進す

ることができたのではないかと感じる。2021年度は、オンラインの活動が中心であり、現地の方との交流はオンラインでのミーティングに限定されていたが、2022年度は新型コロナウイルス感染症の規制緩和に伴い、現地に訪問し、現地のことへの学びを深める機会になった。そして、2023年度は、源泉を活用した温泉神社のお祭りを復活させるという今後の方針について定めた上で、八雲神社の例大祭という地域の伝統行事に参加させていただき、今年度は八雲神社例大祭への継続開催に加え、ビンゴ大会への挑戦と源泉活用に取り組むことができた。今までの活動は小野町の観光資源などの視察が中心であったが、昨年度からは八雲神社の例大祭において地域の方と共に行事に参加させていただき、2年連続で携わることで、地域の皆様に認知していただき、さらに親密になることができたと感じると共に、より一層小野町や谷津作行政区への理解を深めることができた。

最後に、来年度以降に温泉神社の祭りを復活させるという方針を決定した以上、温泉神社のお祭りの復活に向けて、オンラインでのミーティングを通して、地域住民の意向を踏まえながら、アイデア出しなどを積極的に行っていく必要があると考える。ミーティングを重ねて現地の方の意向を踏まえながら、来年度以降はチーム名にあるように「大地の泉」を活用する温泉神社のお祭りに向けて今までより活発な話し合いや調査、企画の実行により、住民同士が「つながる」機会を創造することで、谷津作行政区の活性化に携わっていききたい。

謝辞

今年度は、複数回のオンライン・ミーティングの開催や、2度の現地活動を受け入れていただきました。今年度も私たちと関わり、活動するとともに協力していただいた小野町観光協会会長の二瓶晃一さん、小野町谷津作行政区内に居住する齋藤直美さん、小野町地域おこし協力隊の阿井由加子さんをはじめ、地域活性化に尽力されている地域住民の方々には大変お世話になりました。2019年度からの長きにわたってこのような活動の機会をいただけることは、私たち学生にとって非常に貴重な経験でありました。これからも引き続き、よろしく願いいたします。

毎年、福島県地域振興課の担当者の皆様には本当にお世話になりました。福島県地域振興課の皆様ならびに社会システム株式会社の皆様をはじめとし、本事業に関わったすべての方々に対しまして、この場をお借りして御礼を申し上げます。